



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 202 号 2010.11.23 発行 社会政策研究所

### 社会保障は受け身から参加型へ—改革理念で有識者検討会

キャリアブレイン 2010年11月22日

社会保障改革に関する有識者検討会（座長＝宮本太郎・北大大学院法学研究科教授）は11月22日の会合で、現行制度の課題や改革の基本原則について協議した。宮本座長は、国民の社会参加を強めるなど「能動的な安心」を求めていくことを、改革の目指す基本理念として提起した。

検討会は非公開で行われた。事務局によると、現行の社会保障制度については、家族形態や雇用システム、経済成長の鈍化といった社会の変化に対応できていない 年金や介護などに関する幸福感、満足感が低い 貧困率が上昇している—などの課題があるとの認識で一致。過去の関連審議会などでの検討結果を尊重すると同時に、この認識を踏まえ、これまで欠けていた貧困や雇用などの視点からも議論を補強していくことを確認した。

その上で、宮本座長が改革の理念として、国民の社会参加を強める 雇用を中心にして能力を形成、発揮する機会を広げる 社会の分断や貧困を予防する 家庭や地域、職場などのつながりを強め、相互信頼を高める—などを提案。「『受け身の安心』ではなく、積極的に参加して道が開けるといって『能動的な安心』を強める」といった考え方を示した。

さらに、高齢世代に偏りがちだった社会保障を全世代対象にすることや、次世代に負担を先送りしない安定的な財源の確保など、改革を進める上での基本原則についても提起があった。

### 障害者のきょうだい持つ喜びや本音共有しよう 龍谷大生呼び掛け

中日新聞 2010年11月22日

悩みを打ち明けて語り合いながら企画の準備を進める学生たち＝大津市で

龍谷大社会学部臨床福祉学科の学生たちが、障害者が兄弟や姉妹にいる人の「心の声」に耳を傾け、交流の輪を広げようと奮闘している。23日午前9時半から、障害者の兄弟について著書がある戸田竜也さんを招いた講演会を開く。

企画したのは、白石正久教授（障害児教育学）のゼミで学ぶ約20人。兄弟や姉妹が障害者という学生も多い。ゼミの中で、親の意識が、障害のある兄弟や姉妹に行きがちなの雰囲気を感じながら「私の話も聞いてほしい」と思ったことや、「わがママを言っではいけない」と気持ちを押し殺した経験を本音で語り合った。

一方で、障害者の兄弟や姉妹だからこそ、福祉の道に進む思いを強くしたことなど人生に影響を与えていることも気づき始めた。学生は「障害のある兄弟や姉妹とは、親よりも



長く共に生きていく。進路や結婚、親が亡くなった後の不安や一方にある喜びを共有したい」との思いを強くした。今後は、同じ立場の人との交流会を開き、輪を広げる。

ゼミ代表の中尾愛美さん(22) = 4年 = は「日ごろ感じている悩みや不安を分かち合いたい。障害はプラスの面も多く、家族のきずなも強い。幸せも感じ合いたい」と参加を呼び掛けている。

講演会は午前9時半から、大津市の同大瀬田キャンパス8号館。戸田さんが「よい子じゃなくていいんだよ」との演題で開く。参加費は1000円。申し込みや問い合わせは、白石教授研究室 = 077(543)7620 = へ。(木原育子)

## 福祉の網 出所者に広げる 【ひと模様】

朝日新聞 2010年11月22日

県地域生活定着支援センター長 / 中尾薫さん(60) = 宇部市

刑務所から出た高齢者や障害者を支援するため、全国で設置が進む地域生活定着支援センター。県内では全国に先駆けて昨年7月、山口市の県社会福祉協議会内にできた。その初代センター長として、出所者を福祉サービスを受けられるようにつなぐ活動に取り組んでいる。

「高齢者や障害者は、福祉の網から漏れたために罪を犯すケースが多い。彼らを支援することは社会の犯罪を減らすことにつながる」

センターのスタッフは協議会の社会福祉士を含めて計4人。高齢者や障害者が間もなく出所すると連絡があれば、刑務所に行って面会し、出所後の生活の希望を聴く。希望に沿うよう住まいや受け入れてくれる施設を探す。これまで、高齢者7人、障害者6人の計13人を支援した。

うまくいくことばかりではない。ある老人ホームからは「身元引受人がいないとだめだ」と断られた。家族から「帰ってきてほしくない」と言われたこともある。仕事に就ける人はほとんどいない。

「受け入れる不安は当然あるだろう。社会の理解を深めるのが僕たちの仕事」

3月まで県庁マンだった。農林や土木、教育委員会など様々な部署を渡り歩いた。福祉の経験は少なかったが、退職直前の2月に協議会から持ちかけられ快諾した。20代の3年間、生活保護の担当をし「困っている人が支援によって自立していく。とてもやりがいがあった」からだ。

今は罪を犯した高齢者や障害者のために頭を下げる毎日だ。「地道な仕事だけれど、少しでも彼らの手助けになれば」(伊藤和行)



## 「介護者は、もっと利口になる必要がある」 - 全国介護者支援ネット準備会

キャリアブレイン 2010年11月22日

介護者を支援する組織が集う「全国介護者支援ネット」(仮称)の準備会が11月20日、初の情報交換会を開き、NPO法人関係者ら約40人が参加した。参加者からは、自治体との連携の必要性や、男性介護者からの本音を引き出すことの難しさを訴える声が上がったほか、「家族を安心して任せられない事業所も多い。介護者自身がもっと制度を学び、利口になる必要がある」とする意見も出た。

近年、支援のためのNPO法人が全国各地で発足するなど、介護者のニーズを把握し、サポートする活動が本格化している。また、NPO法人介護者サポートネットワークセンター・

アラジンのように、先行して支援に取り組む団体には、「組織の立ち上げ方や、運営の仕方が分からない」といった質問が全国から寄せられるようになった。こうした状況を受け、アラジンでは、他の団体と協力して「全国介護者支援ネット」の設立を目指す準備会を立ち上げることを決めた。

初の情報交換会には、地元の寺院と連携して交流の場を提供する「介護者応援ネットワークみやぎ」(仙台市)や、介護者や要介護者がいつでも訪れ、交流できる場を提供する「つどい場さくらちゃん」(兵庫県西宮市)、セミナーを定期的に企画する「さいたま NPO センター」(さいたま市)など、介護者支援を手掛ける団体の関係者らが参加。それぞれが活動内容を紹介した。

その後、活動の場所や資金の確保、行政との連携などをテーマに、意見交換が行われた。参加者からは、「個人や小さな組織では、行政の協力は得にくいので、地域内で同様の活動をしている団体とネットワークをつくと有利」「活動の場として、住人がいない古い民家を活用することはできないか」「介護者だけで会を立ち上げて運営は難しい。サポーターを養成すべき」といった意見が上がった。

また、介護者のためのイベントや集会などに、男性介護者があまり参加しない上、参加しても本音で語ることが少ない点も話題となった。参加者からは、「料理やちょっとした力仕事など、何かの役割や目的を持ってもらうことで参加しやすくなるのではないか」「特に男性については、肩書や年齢を忘れて参加してもらうことが大切」といった意見が出た。



「全国介護者支援ネット」の準備会の情報交換会(11月20日、東京都内)

たまには太陽の子・手をつなく、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなく育成会 社会政策研究所発行